

進行中の「虐殺」: 南京に関する真実とフィクションを区別する 証拠を通して自分自身で考えること

ジェイソン・M・モーガン JASON M. MORGAN

2023/07/26 2023/07/26

1937年12月、日本軍が南京市に入城した。そこで何が起こったかは、長い間、教条的に信じられてきた。

現代史家の中には、日本兵が狂乱と暴動の中で20万人もの民間人を殺害したと断言する者がいる。中国共産党もこれに便乗し、殺害された人数を30万人に増やしている。また、日本人による集団強姦もあったとしている。

これを疑う者は誰でも、「否定主義者(歴史修正主義者)」として非難される。非難する側にとって、1937年後半の出来事は、いわゆる「南京虐殺」として、疑問を挟む余地のない自明のことであり、その通称は、絶対に変更してはならないのである。

しかし、歴史的事実は変えられない。歴史の探求に終わりはない。真実と虚偽とを選別し続けなければならない。目撃者は厳しく追究し、情報源を調査し、新たに発掘された文書はきちんと評価しなければならない。主張自体も、主張する人の動機と併せて考察しなければならない。

1937年後半の南京問題は、まだ研究途上であり、複雑である。独断的な主張や「否定主義」という反射的非難は、公正な評価ではない。こうした反射的非難は、大東亜戦争の研究者たちの真摯な努力を踏みにじるものである。今こそ南京を見直し、事実と状況を十分に踏まえたうえで、客観的に検討すべき時である。

南京に関する学問は進化し続けている

国際歴史論戦研究所の研究員 池田悠は南京の学術的理解に新たな展開をもたらす新事実を明らかにしている(『正論』2023年3月号)。

東中野修道は、南京の権威として頻繁に引用される研究者である。しかし、池田は、東中野が、中国の国民党による外国人向け、特に米国に向けられたプロパガンダ活動に重点を置きすぎていることを問題視する。

池田は、『正論』内で次のように指摘する。つまり、国民党のプロパガンダは、董顕光(ホリントン・K・トン)(1887~1971)や曾虚白(1895~1994)が指揮して作成され、ハロルド・ジョン・ティン

パーリー(1898~1954)ら協力者が故意に脚色したものであると。しかし、そのプロパガンダは、南京の宣教師 マイナー・ベイツ (1897-1978)の報告より日付けが先立っていたという。言うまでもないが、歴史における因果関係を再構築するには、タイミングが重要である。南京に関しては、金をもらった宣伝活動家たちより宣教師たちのほうが、圧倒的に上手だったようである。

池田は、東中野が、董、曾、ティンパーリーらの南京虐殺プロパガンダに依拠し過ぎていると批判する。董、曾、ティンパーリーらは、当時、国民党や中国軍から金をもらって働いていたのである。東中野はプロパガンダ的要素を強調し過ぎており、南京とその周辺の諸事情への注意が不十分だというのが池田の考えである。

池田は、南京に関して信じられている偽情報のほとんど、あるいは大部分の発信源として、宣教師そのものにもっと焦点を当てるべきだと反論する。

南京の「安全地帯」とは何だったのか？

ベイツに加えて、池田が特に注目するのは、1937年11月18日開催の非公開宣教師会議で宣教師 ウィルソン・プルマー・ミルズ(1883-1959)が作成した親書である。ミルズは親書で、宣教師たちに「中国軍を励まし、慰める」ように勧告している。池田は、この勧告により、南京の安全地区が創設されたと指摘する。

しかし、「安全地区」は実際には安全地区ではなかったというのが池田の結論である。池田は、ミルズが家族に宛てた手紙の中で、この地域を「ナン・ミン・チュー」、つまり「難民地区」と呼んでいることを指摘している。

この違いは非常に重要である。池田は、当時の南京「安全地区」をもう一度、詳細に見てほしいと言う。そこには国民党軍の大砲が設置されていた。日本軍に対する形だけの軍事演習が公的に終了した後、武装国民党軍は「安全地区」に潜伏した。

池田はさらに指摘する。宣教師たちはこのことを隠蔽したばかりか、日本軍に「安全地区」に入らないよう要請し、国民党軍が中国民間人の中にまぎれることを許したのであると。国民党軍は日本の干渉を受けずに、強姦、略奪、放火、その他のテロ行為を犯し続けたのである。

その多くは、後に日本人のせいにされたことを付言する。「中国軍を励まし、慰める」ために活動する南京の宣教師たちの目には、「安全地区」の安全とは、どのように映ったのだろうか。中国民間人の安全のためだったのか、それとも国民党軍とその武器の安全のためだったのか。

「安全地区」を提案したウィルソン・プルマー・ミルズが 中国の政治・軍事問題に深く関与し、日本軍との休戦の仲介役を切望されていたことにも注目すべきである。日本軍と休戦し、南京を

開放するための会議が 戦艦パナイ号で開催された。その戦艦パナイ号は、まさにその翌月、日本軍によって爆撃された。

証拠書類はどこにあるのか？

『正論』2023年5月号には、より詳しい南京関連情報が掲載されている。

近代史研究家 阿羅健一の指摘によれば、外務省には、日本軍が1937年末南京市に進入した後、民間人を殺害、略奪したという主張を裏付けるいかなる文書も見つかっていないという。

阿羅と他の学者たちからなる研究グループが、南京に関する一次資料を丹念かつ詳細に調査したにもかかわらずである。この研究グループは、いわゆる南京虐殺は捏造された戦時中のプロパガンダであると結論づけている。

もちろん、これは南京で民間人に対する犯罪がなかったことを意味するものではない。犯罪は確かにあった。歴史研究家の西岡力が同じ『正論』で次のように指摘している。即ち、中支那方面軍司令官 松井石根(1878~1948)は、南京で犯行に及んだ日本軍の若い「将校」や「一部の兵士」による「忌まわしい性暴力」を「非常に遺憾に思っていた」のである。

どのような侵略や占領でも、強姦、殺人、略奪は起こる。南京も例外ではなかった。

しかし、南京で、日本軍が大量かつ組織的な殺人、略奪、強姦を行ったことを裏付ける文書は、全く見つかっていない。実際、1937年12月に長江沿いの中国中東部で何が起こったかについて、文書と政治的事情とは全く異なった描き方がされている。

では、なぜ外務省は、事実とは異なると抗議しないのかと阿羅は疑問を呈している。

偽りの歴史を永続させる日本の官僚たち

1938年1月4日付け ニューヨーク・タイムズに、難民福祉委員会の外国人教授らが国民党大佐とその側近6名を南京に匿っていたと書かれている。国民党は中国人難民の中に、ライフル、リボルバー、機関銃、弾薬を隠して所持させていた。そして国民党大佐たちは、中国民間人を略奪、強姦し、それを日本人のせいにしたことを認めている。

しかし、残念なことに、この歴史の事実は、しばしば政治的取引の犠牲となってきた。

阿羅は、日中共同の歴史研究構想が 2006 年に始まったと指摘する。議長は東京大学名誉教授 北岡伸一である。北岡は 日米同盟創設を支えたトップの一人でもある。北岡は率先して、南京で虐殺があったと宣言した。

日本国内の体制側の支援に後押しされたのだろう。中華人民共和国は 2014 年、国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)主催の「世界の記憶」に「南京事件」を申請し、承認された。

歴史は事実でなければならない

阿羅健一の学術的取り組みを特集した『正論』(2023 年 5 月号)で、同じ研究家の西岡と江崎道朗は、歴史調査は事実を追求するために行われなければならないと強く主張している。

このように厳密な歴史学がどのように効果的に政府と結びつくのかを示す具体例として、西岡は、ジャーナリスト櫻井よしこが主導するプロジェクトに言及する。これは、政府閣僚に事実に基づいた歴史知識を教育するためのプロジェクトである。

同時に、西岡は、故安倍晋三政権下では、日本軍が南京で殺人と略奪を行ったという外務省の誤った歴史的主張を正せなかったことを嘆いている。

真実の歴史のための努力

しかし、西岡は、1997 年から始まった日本の中学校の一部の歴史教科書に見られる事実無根の主張、則ち「日本軍慰安婦」は「強制連行」されたという主張に対する安倍首相(当時 以下同)の反応に、今後の展開を期待している。

日本政策研究センター代表 伊藤哲夫が 2022 年 12 月の歴史認識調査委員会会合で概説したことだが、西岡は、安倍首相がこの問題について、文部科学省大臣を叱責し、教科書の書き直しを要求しなかったことを明らかにしている。歴史が命令に従うことは決してない。

その代わりとして、安倍首相は慰安婦問題を検討するために、国会議員約 80 名から成る研究会を組織した。同研究会はほぼ毎週会合を開き、慰安婦が日本軍による拉致だったと主張する人々との会談も企画した。また、日本軍による女性への強制連行を誤って認めた悪名高い河野談話の河野洋平からも聞き取りを行った。さらに、官房副長官として河野談話の作成に尽力した石原信雄(1926~2023)も招聘した。

あらゆる方面から意見を聞き、歴史的研究や文書を精査した結果、最終的合意が形成された。それは、「日本軍慰安婦」の「強制連行」はなかったというものである。ようやく歴史の真実が勝利したのである。

南京を政治利用してはならない

安倍首相が自分自身や同僚の教育に努めたことが示すように、歴史は事実でなければならない。しかし、事実と人物は共に尊重されなければならない。歴史の真実を発見し、守り抜くには大変な努力を伴う。真実を否定する反対意見に打ち勝つには、勤勉さと誠実さ、そして経験的証拠を辛抱強く提示し続けることが必要である。

歴史研究には、タブーも、教義も、修飾語もない。真実かどうかだけが唯一の基準であり、唯一の目標である。

『正論』で、西岡、江崎、阿羅は主張する。政治家が言葉の意味を短絡的に変えたり、歴史的な真実を無視して、自分に都合の良いように手を加えることは厳に戒めなければならない。

1937年の南京は長らく政治利用されてきた。しかし、真実は徐々に明らかになってきている。その真実を歓迎しよう。そして忘れてはならない。中国共産党が南京での30万人殺害について長い間非難してきたのは国民党であったこと、日本を非難し始めたのは近年になってからであることを。

アイリス・チャンを読む

真実、特に歴史の真実に到達するには長い時間がかかる。合意なるものが政治的駆け引きの結果というのはよくあることだ。我々一人一人、そこで主張されていることを調べる方法を身に着けなければならないし、生涯にわたってその努力を続けなければならない。

私が初めてアイリス・チャンの大衆向けペーパーバック『ザ・レイプ・オブ・南京 (The Rape of Nanking)』を読んだのは20年以上前だ。中国系アメリカ人の若いジャーナリストが書いたと評判の1997年のベストセラー本に、私は衝撃を受けた。その本に詳細に描かれている恐ろしい邪悪な行為に怒りを覚え、陰惨で詳細な証言を裏付けるかのような写真を見て気分が悪くなった。

チャンの本を読んだ当時、私は日本に住んでいた。いわゆる南京レイプには記録による裏付けがないと主張する人々がいることは知っていた。しかし、私がこの目で確かに見た虐殺の写真、その虐殺を言い繕おうとする人は誰であろうと、怒りは膨れ上がるばかりだった。

チャンを否定する証拠写真

チャンの本を読んだとき、私はまだ日本語を勉強中だった。当時はまだ、日本語で書かれた長いエッセイや本を読むほどの日本語力はなかった。その後、英語以外の研究を自分で探求し始

めるようになるにつれて、『ザ・レイプ・オブ・南京』に対する私の見解は変わっていった。歴史家でもないチャンが資料を誤って解釈しているという重大な欠陥が見えてきたのである。

しかし、それでも南京レイプの全体的な輪郭が変わるものではないと思っていた。結局のところ、チャンはただの作家にすぎなかった。たとえチャンが複雑な日中戦争や、占領された都市における軍の指揮の現実を理解していなかったとしても、それでも南京レイプが決して起こっていなかったということではない。

しかし、その写真は、チャンの本に対する些末な批判を超えて、もっと大きな視点からの議論に目を向けさせた。

日本軍の中国攻撃に関する報告の中で、最も悲惨な画像の一つは、半壊した駅のプラットフォームに座って泣き叫んでいる、1歳かそこらの子供の写真だ。この写真は日本軍の残虐性を示すものとして、アメリカのライフ誌(1937年10月2日号)に掲載された。

ところが、この写真は演出されたものである。その証拠は、欺瞞を記録した別の写真にある。その写真には男と少年が写っている。男は泣いている幼児が主役になるように場面を調整している。しかも撮影されたのは南京でさえない。ほぼ170マイル離れた上海だ。これは日本に対する嫌悪を引き起こすための挑発的プロパガンダ写真である。これこそまさにチャンが狙っていたことなのだ。



欺瞞を画策した男は国民党支持者のホリントン・K・トン(董顯光)である。この男も自伝の中で同じことを認めている。オーストラリア国立大学教授シュゲ・ウェイのエッセイ「武器としてのニュース:ホリントン・トンと国民党の中央集権化した対外プロパガンダ、1937～1938」(2014)を読めば、さらに興味を掻き立てられるだろう。

まさに「武器としてのニュース」である。

大きな嘘を吐く

駅で泣き叫ぶ赤ん坊のプロパガンダ写真は、そのプロパガンダ写真がどのように演出されたかを示す別の写真とともに、Kanzako & Kashima 著『Making of The Rape of Nanking: A Big Lie from World War II(でっち上げの「ザ・レイプ・オブ・南京」:第二次世界大戦の大きな嘘)』(2021)の表紙を飾っている。

この本は、日本とアジアの歴史を研究するカナダのトロント正論から 2021 年に出版された。

読者はこの本のサブタイトルを見てがっかりするかもしれない。南京レイプは「大嘘」だって？ 嫌悪感を持って反発する人もいるかもしれない。トロント正論は、ホロコースト否定派団体に違いないと。

実際、ミロスラフ・マリノフは、トロント正論のメンバーにはよく知られたフリーランス作家であり、ユーラシアにおけるユダヤ人絶滅を目指す国家社会主義者に反対して活動した日本やその他地域の人々の研究も行っている。私は 2018 年にトロント正論から地元のシナゴークで講演するよう招待された。トロント正論が反ユダヤ主義であるという主張を 私は断固として否定する。

大きな嘘といえば、第二次世界大戦が嘘にまみれていたことを思い出すべきだ。「大きな嘘」という用語は、「我が闘争」に由来している。ナチスのテロはすべて「大きな嘘」に起因していた。ソ連の独裁者ヨシフ・スターリン(1878～1953)の見せしめ裁判と粛清は「大きな嘘」によって可能になった。戦後のソ連の偽情報も、大小さまざまな嘘の連続だった。政治的利益のために、憎むべきライバルに対して有利な立場を築くために、物語を捏造することはよくあることである。

実際、『ザ・レイプ・オブ・南京』は砂上の楼閣である。『Making of The Rape of Nanking: A Big Lie from World War II』の中で、Kanzako & Kashima は、1937 年末から 1938 年初め、日本軍による南京陥落中に撮影された写真 12 ページを分析している。写真の多くは、チャンによって改竄され、でっち上げられたキャプションがつけられていた。『Making of The Rape of Nanking: A Big Lie from World War II』には、チャン作『ザ・レイプ・オブ・南京』とは反対の物語が語られている。



情報源のさらなる綿密な精査

写真や映画は、パズルの一片にすぎない。画像には文脈が必要だ。チャンがその文脈の参考にしたものに、日本軍統治下の南京にいた二人の外国人の日記がある。

一人はジョン・ラーベ（1882-1950）、ナチスの実業家で、南京安全区国際委員会の委員長だった。もう一人は、ウィルヘルミナ（ミニ）ヴォートリン（1886-1941）、アメリカ人宣教師であり、金陵大学の校長だった。二人とも、1937年から1938年冬にかけての激動の数週間から数か月間に見たものを、リアルタイムで書き残している。

Kanzako & Kashima は、『Making of The Rape of Nanking: A Big Lie from World War II』（本文 91 ページ、上述の写真を含めて約 20 ページの付録）の中で、非常に詳細に、チャンが引用した情報源について論述している。要するに、チャンは自分が引用した情報源を、読んでいなかったか、理解していなかったか、或いは意図的に歪曲したかである。

ラーベ日記の「発見」という歌い文句にもかかわらず、また、チャン自身が、ヒトラーに直接報告書を送ったラーベを「中国のオスカー・シンドラ」と呼び、ヴォートリンを誇張してアンネ・フランクと例えたにもかかわらず、これらの宣伝は誤った前提に基づいている可能性がある。

ラーベの例を見てみよう。彼が監視した南京安全区には 20 万人から 25 万人が収容されていた。ラーベ自身の推定では、殺害されたのは 5 万人から 6 万人である。一方、チャンと 中国共産党が主張する日本軍による虐殺は 30 万人である。

しかし、南京安全区には「日本軍と外交官の十分な知識と同意により」南京地域の難民が保護されていた。それは、Kanzako & Kashima が書いている通りであり、ラーベの日記からも明らかである。

もし日本人が躍起になって中国人を虐殺していたのなら、なぜ 30 万人もの人々たちは無防備な安全区を脱出しなかったのか？もし日本軍が安全区で国民を虐殺していたのなら、いったいなぜ 30 万人もの人々が、ただぶらぶらして殺されるのを待っていたのか？

チャン自身が書いているように、街中に噂が飛び交った。虐殺の噂は、戦禍の南京住民の間を野火のように駆け巡っただろう。そして、住民たちはちりぢりに逃げ出していったらう。

誰が誰のために働くのか？

ヴォートリーの言葉に対する、チャンの理解の仕方も不可解である。Kanzako & Kashima は、宣教師教育係ヴォートリーが日記に、中国人が大いに苦しめられているのは、日本ではなく国民党総司令官蒋介石(1887~1975)の「焦土作戦」のせいであると記述していることを指摘する。

疑惑のレイプ・オブ・南京からわずか半年後、蒋介石が国民党軍に 中国中部で黄河を放流するよう命令したことを思い出してほしい。放流によって 90 万人が殺害され、数百万人が家を失った。尚、国民党自身の推定では死んだのは 80 万人である。

南京大学の歴史学者、マイナー・サール・ベイツ(1897-1978)も、南京安全区国際委員会のメンバーだった。チャンは著書の中でベイツの証言を引用している。しかし、Kanzako & Kashima の報告によると、ベイツは「中国中央政府の顧問だった」という。

南京陥落後、オーストラリア人ジャーナリスト、ハロルド・ジョン・ティンパーリー(1898-1954)は、南京に関する『戦争の意味：中国における日本のテロ』(1938)を書いた。この本は、レフト・ブック・クラブ(左翼クラブ)シリーズの一部として出版された。レフト・ブック・クラブとは、イギリスの知識人で共産党シンパのヴィクトル・ゴランツ(1893-1967)が創立した出版グループである。

(ゴランツは、エドガー・スノーの『中国の赤い星』(1937)も出版している。『中国の赤い星』は毛沢東(1893~1976)と中国共産党を称賛する本である)。チャンは『ザ・レイプ オブ 南京』の中で、ティンパーリーを好意的に描いている。

ティンパーリーの情報はどの程度信頼できるのだろうか？ティンパーリーの元雇用主であるイギリスのガーディアン紙は否定しているが、当時の文書やその他の資料(その一例については後述)から、ティンパーリーは国民党に雇われた職員であったことが証明されている。

ガーディアン紙の抗議はともかく、ティンパーリーの情報は中立ではなかった。ティンパーリーは前述のホリントン・K・トンと協力して反日プロパガンダに取り組んでいた。彼はフェイクニュースを作るために報酬をもらっていたのである。

伝聞は事実として報告され、再報告される

上述のような背景は非常に重要だ。しかし、大衆向け人気本『ザ・レイプ・オブ・南京』はこうした裏事情に一切触れていない。著者アイリス・チャンは歴史家ではないので、杜撰な面は多々あったが、それ以上に深刻なのは、情報源について無頓着だったことである。

Kanzako & Kashima による近著『Making of The Rape of Nanking: A Big Lie from World War II』(2021)で、研究者でもある二人は、チャンが、ナチスの実業家ジョン・ラーベ(1882~1950)とアメリカ人宣教師ミニー・ヴォートリン(1886~1941)の日記中の「南京強姦事件」に関する数字や証言を、不正確に(そして、おそらくは意図的に)細工していることを証明している。

チャンが、ラーベとヴォートリンの日記内の記述を都合よく切り取っていたとするなら、ラーベとヴォートリンが日記内で繰り返していたのは噂であること、ラーベもヴォートリンも、それらの噂のほんの一部でさえも自分自身で確認できていなかったことも認めなければならない。実際、ラーベ、ヴォートリンなど南京の国際委員会に報告された情報の多くはデマ、あるいは意図的に捏造されたものだったのである。

当時の副総領事 福田篤泰(1906~1993)は、南京での日本人の行動について国際委員会から寄せられた苦情や懸念に対応するのが仕事だった。Kanzako & Kashima は、福田が、多くの時間をかけて、南京での日本人の行動に関する報告を精査したことを指摘している。福田には、それらの報告の多くが根拠のないことはわかっていた。しかし、福田以外には、ヴォートリン、ラーベらが報告し、チャンが事実として繰り返し述べている主張をわざわざ詳しく調べようとする人は、誰もいなかったようだ。

ごまかされた矛盾

チャンは著書の中で福田^{※1}の言葉を一度引用している。チャンは福田^{※1}を、南京殲滅を望む日本軍指導者たちをなだめるために働いていると描いている。南京にいた西洋人の言葉を引用しながら、その引用中に福田^{※1}の言葉を直接引用している。西洋人たちは日本軍に、市内の秩序を維持するためにパトロールを強化するよう要請しているのである。不思議ではないか。日本軍は平和維持者だったのか、それとも大量殺人者だったのか、どちらだったのか。

※1 原文では”Tokuda”だが、“Fukuda”の誤記かと思われ、訳文では「福田」とした。

チャンがこのような露骨な矛盾に気付かなかったのは注目に値する。こうした矛盾の例は他にもたくさんあるが、出版社も気付かなかったのか？

同じような矛盾はまだある。多くの中国軍が——不法にも——日本が難民区域と認めていた区域内に隠れていた。このような状況下では、報道されている強姦、略奪、殺人は、それが事実であるなら、日本人同様、中国人にも簡単に犯すことができた筈である。

しかし、チャンは、根拠の有無にかかわらず、未確認情報でさえも、残虐行為は a) 真実であり、b) 日本の責任であると仮定している。たとえ a) と b) 以外の可能性が多くあったとしても、チャンは無視した。

30万人が虐殺された時期の特定にも問題がある。蔣介石政権下の国民党政府は、中国に関するニュースに飢えた外国特派員に向けて毎日報道記事を発表していた。それらの中に虐殺についての発表はなかった。チャンがいうところの、猛烈なペースで虐殺が行われていたであろう1937年後半から1938年初頭でさえも、虐殺についての発表はなかった。

英語圏の学者の中には、この矛盾を説明しようとする者もいる。何が真実かを決めるのは読者自身である。

しかし、説明が見つからないのは、チャンが「大虐殺」中と書いているその時期に、南京の人口が増加したこと、を国民党が公式文書で示していることである。

余談だが、チャンは『ザ・レイプ・オブ・南京』で、コロンビアの歴史家 キャロル・グラック、他にもアメリカやイギリスの著名な研究家に謝意を表している。これは特筆に値する。彼らは「出版前に私の本を時間をかけて精査し、示唆に富む学術的知見を盛り込んで、内容を充実させてくれた」とチャンは書いている。

『ザ・レイプ・オブ・南京』で、チャンは歴史上ありえないようなばかげた出来事についても記述している。例えば、マシュー・ペリー提督(1794～1858)は1853年に「金属で覆われた」船で日本

に到着したという。しかし、装甲艦は 1859 年まで発明さえされていない。アメリカで初めて使用されたのは、南北戦争(1861~1865)である。

チャンはまた、ペリーが武装したアメリカ軍に江戸の街中を行進させたとも述べている。こんな事実もない。

それでも、グルックはチャンの本を「充実させた」というのである。

ちなみに、グルックは、慰安婦物語について、北米でも最も熱心な支持者の一人である。

研究が日本語だけで自足しているための閉塞性

研究者兼作家 阿羅健一は、南京に関する詳細なエッセイや本を数多く手掛けている。また、日本のメディアや政治家が南京事件をどのように伝え続けているかについても調査している。

阿羅が明らかにしたことの一例は、日本の外務省は、巷で信じられている南京レイプを裏付ける文書証拠や資料を一切提出できないことである。また、極東国際軍事裁判(IMTFE、東京戦犯裁判)に提出された南京の埋葬記録は、数字が大幅に水増しされて改竄されたことも明らかにしている。

残念なのは、阿羅の著作の中でも一押し、南京にいた日本人 48 人の目撃証言を翻訳したものを除いて、全て日本語で書かれていることである。

アイリス・チャンの『ザ・レイプ・オブ・南京』を批判した東中野修道の研究書(1999)も同様に日本語版のみである。

水間政憲は、日本に関わる論争の歴史を分析した優れた本を数多く出版している。水間の 2017 年の南京に関する本は、歴史的写真が満載で、日本語がわからない読者でも楽しめるだろう。

池田悠は、一次資料に焦点を当てて南京事件を研究してきた。

早坂隆の 2021 年の本には、大東亜戦争中のさまざまな重要事件が扱われており、南京に関しても直接得られた重要な説明が含まれている。しかし、この本も日本語版のみである。

残念なことに(しかし当然のことかもしれないが)、西側諸国の人々が南京について知っていることの多くは英語の情報源から得たものである。南京について書いた人全員が真実を語ったわ

けではないことを考えると、二重に残念である。他のさまざまな証言と、理想的には複数の言語にわたる証言を照合することが不可欠である。

証人たちは語る、そして語らない

Kanzako & Kashima は、ロバート・O・ウィルソン(1906~1967)が 1948 年に IMTFE の法廷で行った証言に言及している。ロバート・O・ウィルソンとは、アイリス・チャンが「南京唯一の外科医」と挙げている人物である。

しかし、これは真実ではない。当然、日本軍には外科医が常駐しており、そうした外科医やその他の医療関係者は日本人だけでなく中国人の負傷者も治療していた。

ウィルソンの証言がどこまで真実なのか、疑問に思う人もいるだろう。例えば、ウィルソンは IMTFE で、戦車が通過できるように日本軍が死体で埋めた塹壕を見たと言っている。Kanzako & Kashima が慎重に指摘しているように、これは不合理だ。人間の体では戦車の重量を支えることはできない。

チャンはまた、死体で埋められた池についても言及している。これも不合理だ。池の利用可能な領域を埋めるために、どのようにして、そしてなぜ、誰が、水辺から死体を移動させたのかは説明されていない。また、おそらく説明不可能である。

チャンはウィルソンの他の物語も引用しているが、Kanzako & Kashima が指摘するように、ラーベとヴォートリーの日記ですらウィルソンの主張の一部については何も記載していない。チャンの本の主要目撃者であるラーベとヴォートリーは、例えば「連隊全体」による中国人少女の集団強姦については完全に沈黙している。(Kanzako & Kashima は、日本陸軍の一個連隊が「約 3,000 人」で構成されていたことを思い出させてくれる。)

ラーベもヴォートリーも、「首が切断されそうになった女性が首の骨からぐらぐらしているのを見た」というウィルソンの奇妙な主張についても触れていない。日記作者たちが沈黙している理由は、おそらく Kanzako & Kashima が書いているように、頸動脈が——気管は言うまでもなく——首を通っているからだだろう。頭を「ほぼ切断」され、脊柱の上で「ぐらつかせ」ながらまだ生きているということは解剖学的に不可能である。

さらに、チャンは、このような恐ろしい状態にある女性が生きているだけでなく、自分で歩いてウィルソン医師の診療所まで行くことができた、私たちに信じ込ませようとしたのである。

さらに、Kanzako & Kashima が指摘するように、ウィルソンはこれらの話を IMTFE にさえ伝えなかった。彼がその物語を話したのは妻のマージョリー・ウィルソンだった。数十年後、ウィルソン

夫人はチャンに電話でこのことを伝えた。チャンは、真実を伝えると称するベストセラー本『ザ・レイプ・オブ・南京』で、この伝言ゲームの情報を繰り返している。

虐殺を別の虐殺で隠蔽する

また、Kanzako & Kashima は 通州事件にも言及している。通州事件とは、北京東方の通州に住む日本人 223 人が、国民党兵士によって惨殺された事件である。南京陥落の約半年前、盧溝橋事件の後(1937 年 7 月初旬)のことである。

南京虐殺とは異なり、通州事件は歪曲や空疎な記録文書に依拠するものではない。拓殖大学及び東京大学元教授 藤岡信勝は、通州事件の日本人生存者の証言に基づき、誰にでもわかる報告書を作成している。

南京虐殺をめぐる物語は、まさに実際にあった通州事件の虐殺を基にして作られたと主張する学者は藤岡だけではない。通州事件での虐殺は、多少なりとも、『ザ・レイプ・オブ・南京』に実際の生の(そして死の)インスピレーションを与えたと思われる。

北京と南京の関係

近著『『Making of The Rape of Nanking: A Big Lie from World War II』(2021)で、著者かつ研究者の Kanzako & Kashima は、アメリカ人作家アイリス・チャン作『ザ・レイプ・オブ・南京』(1997)の多くの矛盾と誤りを暴露している。

しかし、Kanzako & Kashima は、アイリス・チャンの反日的主張と中華人民共和国の同様の主張との一致点については詳しく述べていない。

私は、他の多くの活動家の中で特にアイリス・チャンを主役とした 1996 年 12 月の反日シンポジウム・プログラムの解説書を調べた。「チャンの」本が 1997 年に出版されたことに注意してほしい。

この反日シンポジウムを主催したのはイグナティウス・デインという人物だ。デインは、北カリフォルニアに拠点を置く「アジアにおける第二次世界大戦の歴史保存のためのグローバル・アライアンス」を設立した人物である。グローバル・アライアンスは、中国共産党のさまざまなプロパガンダと足並みをそろえて活動している。

オープンソースのニュース記事によると、デインは「(チャンの)初期の研究の一部を後援した」とされる。『ザ・レイプ・オブ・南京』には デインとグローバル・アライアンスが資金の一部を提供したらしい。チャンは、『ザ・レイプ・オブ・南京』で、1996 年の反日シンポジウムに出席した他の

数人とともにディンに謝意を表している。そのうちの1人は、カレン・パーカーだ。カレン・パーカーは、慰安婦問題に関する対日訴訟に法的影響力を与えてきた「人権弁護士」である。

2004年11月、アイリス・チャンは妄想など重度の精神疾患で死亡した。彼女はカリフォルニアの静かな道路沿いの車の中で自殺した。チャンは3通の遺書を残している。最後に読まれた内容の一部：

私は、自分が想像していたよりも遥かに大きな勢力に雇われ、後に迫害されたという信念を決して拭うことができません。それがCIAなのか他の組織なのか、私を知ることは決してないでしょう。私が生きている限り、これらの勢力が私につきまとうのをやめることは絶対にないでしょう。

再びオープンソースの報道によると、イグナティウス・ディンは後に「中国当局と協力して」、カリフォルニア州クパチーノに、チャン追悼の博物館を計画したという。

歴史の記録を正す

1937年と1938年の南京に関するアイリス・チャンの本には大きな欠陥がある。これは、中華人民共和国とアメリカの中華人民共和国支持者によるプロパガンダ活動の拡大版でもある。

しかし、こうした背景があるからといって、日本軍が南京を占領した1937年と1938年に何も惨事が起きなかったということにはならない。当時の指揮官、上海派遣軍司令官兼将軍 松井石根（1878～1948）は、部下による強姦と略奪を阻止するために多大な労力を費やしていた。戦争には、強姦、略奪、そして殺人がつきものである。規律の厳しい日本軍でも例外ではなかった。

松井は、非常に胡散臭い証言の中でも特に胡散臭い、「南京唯一の外科医」ロバート・O・ウィルソンの証言により、第二次世界大戦後アメリカ人により処刑された。ロバート・O・ウィルソンは1937年から1938年、南京に駐在していた。Kanzako & Kashimaは、南京事件の真実が少しずつ明らかになってきている現在、松井の名誉を回復するべきだと主張する。名誉回復を要求することは、ごく単純で妥当なことと思われる。

コンテキストの組み立て

そうはいうものの、松井が強姦や略奪を阻止するためにあれほど奮闘したということは、強姦や略奪が南京で起こっていたということである。松井の奮闘の例や、一般的に戦争で軍隊が都市を占領したときの例からわかるように、南京で日本兵が民間人を虐待しなかったという議論は支持できない。

読者には、歴史家 秦郁彦の南京関連の著作を参考にしてほしい。チャンも引用しているが、秦は文書証拠に基づいて研究し、南京が何事もなく陥落したという主張を強く否定している。

(尚、1997年、プリンストン大学での秦のプレゼンテーション中、チャンと活動家仲間たちが挑発するという恥ずべき衝突があった。)

彼の研究や分析は進行中であり、随時更新されている。秦の推定する南京死亡者数は、チャンが引用した数字の約7分の1である。

『ザ・レイブ・オブ南京』は何を残したのか？

南京で日本軍が犯した殺人、強姦、その他の犯罪件数がゼロでなかったのは確かだが、秦の推定もおそらく高すぎるだろう。考慮すべきコンテキストは他にもある。

たとえば、ルイス SC スマイルス(1901 ~ 1978)は南京大学の社会学の教授だった。日本が陥落したとき、彼は南京にいた。スマイルスは 1938年6月、次のように書いている。

ここで報告されている数字は民間人を対象としたもので、兵士が含まれる可能性はごくわずかである。この調査報告によると、軍事行動により3,250人が死亡した。死亡者のうち2,400人(74%)は軍事作戦とは別に兵士の暴行で死亡した。日本兵による死亡や暴行が過小報告されていると予想されるのには理由がある。占領軍からの報復を恐れてである。実際、少なからず発生しているにもかかわらず、幼児の暴行死は記録されていない。このことをもって、報告が過少であることが強調されている。

スマイルスの「調査」は次の通りである。

国際委員会の調査は実際には2件だったが、それぞれが複雑に入り組んでいた。市の調査は基本的に南京在住の家族に対するものであり、補足的に、居住中および空家の全ての建物の調査が行われた。また、市場向け野菜生産者に特別な注意が払われた。彼らは食料生産者として、市内の3区域から4区域に分散していた。農業調査は本質的には在住農家調査であり、村の調査[...]と町市場の重要な価格リストによって補足された。

この調査は1937年12月から1938年3月までの期間、南京市とその周辺を対象として行われた。

当時の南京の人口について、スマイルスは「都市(つまり南京)が陥落した時(1937年12月12~13日)、人口は20万~25万人だった」と推定している。

スマイスは国民党に金で雇われた代理人だった。国民党政府の国際宣伝処処長、曾虚白(1895~1994)は、自伝の中で、同処が宣伝活動の報酬を支払ったスマイス(とスマイスへの支払いを仲介したティンパーリー)はよく働いてくれたと書いている。

アイリス・チャンの利用したのが日本の敵に雇われたプロパガンダ活動家たちの数字だったとしても、国際監視団の監視の目が光る都市内で、日本軍が30万人を殺害するには、周辺の田舎から5万から10万人を動員しなければならなかっただろう。

金で雇われたプロパガンダ活動家の数字を利用したとしても、南京の死者数は数千人に満たない。また、個々の殺人(または強姦や略奪)の責任を、日本軍(侵略側)か国民党(防衛側)か、どちらか一方だけに負わせることは事実上不可能である。

繰り返しになるが、読者は証拠を通して、自分自身でよく考えてほしい。

まずは、Kanzako & Kashima の『Making of The Rape of Nanking: A Big Lie from World War II』(2021)から始めるのが最適である。